

# 『天高く猫眠る星』

—天高く猫眠る星シリーズ5—

## 第一章 「草原の聖域」

見渡す限りの草原。高すぎもせず、さりとて低すぎもしない、ちょうど人の膝くらいの高さの草が一面にびっしりと生えている。ここはアルトロンが初めてキャティに着陸した時の場所。そして人類が初めてこの惑星に訪れた時、降り立った地でもある。

やわらかな陽差しを受け、草は風に揺れながら永劫の時を刻み続ける。しかし、それももうあと僅かのこととなる。今しも時計の長針と短針は重なり合い、破滅の時報を鳴り響かせることになるからだ。

どこからともなく猫が1匹、この草原に現れる。全身は黄金色の毛で覆われ、まるで踊るように、優雅に、そして何かを楽しんでいるかのように、ゆっくりゆっくりと草原をかき分けてくる。少し小高く盛り上がった丘までやって来ると遠くを眺めるように2本足で立ち上がる。するとそれが合図だったかのように、あちらこちらからこの猫の周りに色とりどりの猫達が集まってきた。

黄金色の猫は、集まってきた猫達を満足気に眺め見ると、「みやおん」と小さく鳴いた。周りの猫達もそれに合わせ、みんなそれぞれに「みやおん」と鳴くと集まってきた時と同じように、どこへともなく消えていく。

そして、黄金色の猫がまた元の4本足に戻った時には、草原はすっかり元の静けさに戻り、ただ草が風に揺れる音だけが聞こえてくる。猫は前足を大きく前に伸ばすと伸びをして、そして誰にも聞こえないほどの小さい溜息をつく。

「ふーっ」

そこへガサガサと草をかき分ける音が近付いてきて、真っ白な猫が姿を現した。白猫は申し分けなさそうに黄金猫に身体を擦り寄せる。黄金猫は、まるで白猫を慰めるかのように、その真っ白な毛を舌で丁寧な舐め始めた。

もしここに人間がいたら、さぞかし不思議な光景を見たことだろう。さながら緑の草原の中に輝く宝石、黄金色に輝く猫と純白に光る猫とが、敷きつめられた緑の絨毯の上を転げ回り、じゃれ合っている姿を見ることになったのだから。

2匹の猫はひとしきり駆けずり回っていたが、風が変わったことに気付いてどちらともなく身を伏せる。

「シュレー…。」

風が変わったのはここに人間が入ってきたから、既にここに聖域は存在しなくなった。今はもうただの草原にただの白猫がうずくまっているだけ。あの黄金色に輝く猫はどこを探してももう見つからない。

「シュレー…。あんた、どこに行ったのかと思ったじゃない。せめて出ていくなら出ていくと言ってから行きなさいよね。」

「みゃあ…。」

少女が手を伸ばすと、その手をつたって、タタタ…と肩まで駆け登る。

「おや、シュレは見つかったんですか？」

「この子ったら、こんな所でうずくまってるんです。いくら建物の中を探したって見つからないはずだわ。」

「さ、戻りますよ。」

白猫…シュレディンガーと呼ばれている猫は、少女の肩の上でもう1度草原を眺めると、名残惜しそうに一言鳴いた。

「みゃう…。」

「ん…？どうしたの？」

その瞬間、やわらかな風が少女の髪をかき上げた。

少女は何か懐かしい気持ちがしたのを感じたが、それが何なのかは思い出せない。ただ、それが自分にとってとても重要な物のような気がしてならなかった。

「どうかしました？」

今度は青年が少女に訊ねてみたが、少女はただ悲しそうに首を横に振っただけだった。

「ううん、もう行かなくちゃ。みんな待っていますから。」

「いいんですか？」

「はい。」

少女は明るく答えて、そして突然走り始めた。

「さあ、早く。」

青年はとりあえず頷くと少女のあとを追いかけた。

## 第一章 「草原の聖域」

H6. 26. APR

## 第二章 「爆発まであと 12 時間」

「MR-7 星の爆発まであと 12 時間しかないんですよ。早くそこから脱出して下さい。」

モニターの中でたっちゃんが叫ぶ。悲痛な叫びという表現の方がピッタリかもしれない。

「まあ、たっちゃん、落ちつけて…。」

「これが落ちついている場合ですか。そりゃあ、くまさんはまだいいですけど、明子ちゃんは生身の人間なんですからね。」

「大丈夫、明子ちゃんはちゃんと帰すよ。2 時間もあればそっちに着くと思う。」

「そうですか…。」

明らかにまだ不満そうなたっちゃんの顔。なんか私の知らない間に情報部へ移ったらしいけど、ポーカーフェイスができないあたり、まだまだ甘いと思う。ま、そこがたっちゃんのいいところでもあるんだけど。

「で、今いったい誰がどこでどう動いてるんだ？それが分からないことにはどうにも動きが取れないんだけど…。」

「俺と Ryo 先輩は、ここステーションVRにいます。何かあれば 15 分でキャティには行けるはずです。それから…、Mya と柴野さんがVRからさほど遠くない空間で漂流しています。」

「漂流してるって、なんでまた…？」

「カリフォンに積んであった新型推進装置の故障らしいんですけど、Mya とシバちゃんがかんとしてVRへの收容を拒んでいるので、どうにもならないんです。」

あのお嬢さん達の考えそうなことだ。どうせ、VRへ收容されればそのまま地球に送り帰されてしまうとでも考えたんだろう。

「たっちゃん、Ryo に言ってカリフォンに乗り込んで貰うんだ。たぶんシモさんの作った物なら、Ryo は修理できるはずだから。」

「はい。」

あのお嬢さんを説得してVRに收容するよりはRyoに推進装置を見て貰った方が、たぶん早くことが進むだろう。とにかく今は何が何でもあの3人には揃っていて貰わなくては困る。

「他は…？」

「シモさんと佛木先輩も薄々事情を察しているようですけど、2 人とも信州にいるはずだし…、あと他には…。」

「連邦委員長はどうしてる？」

「連邦委員長ですか…、委員長は永世議会で正式に更迭の決定が下されました。本人は現在どこにいるのかは分からないということで、地球では大騒ぎしています。」

「たぶん…、これはあくまでも私の推測だけだね、委員長はMR-7 星系に来ているような気がする。」

「だって、委員長が外へ出るなんて…。」

「だから、あの人は特別だって気がするんだって。異例の若さで連邦委員長に就任して、永世議会で意見を述べることも、更迭されたことも、みんなあの人なら信じられる気がするんだ。」

「そりゃあ…、そうかもしれないけど。」

自分でたっちゃんに言うておきながら、自信がないのも事実だった。ただ、あの人は本当なら自分でキャティを探したかったんじゃないだろうか、ずっとそんな気がしてならない。

「連邦委員長のことは放っておいて大丈夫。それよりキャティの住民を実験船キャティに乗せて爆発を迎えることになるから、できるだけVRでこちらの動きをサポートして欲しいんだけど。」

「うん、それは全部準備できてます。」

「じゃあ、10時間後にまた連絡し合おう。」

「はい、分かりました。」

たっちゃんはキリッと真面目な顔をしてみせると、すぐにモニターが切れた。こっちも軽い溜息とともにモニターのスイッチを切る。

どうやらこの分ならギリギリであの3人のお嬢さん達が揃うことになりそうだ。たぶん委員長も爆発までには姿を現すだろうし、そうすれぱうやむやになっている秘密もはっきりするだろう。

「サシダ、ステーションとの連絡は取れたのか？」

振り返ると、いつの間にかバルチェが私の後ろに立っていた。

「なんとかというところですけど、そっちの方は？」

「既に住民の90%は船に乗り込むことができたよ。あとはキャットテイル-セブン所属の者だけだ。」

「それはよかった。無事に宇宙へ出られたら、至急パーツを地球から取り寄せますから。」

「サシダ、本当にありがとう、キャティ全住民に代わって礼を言うよ。実際、君がいなかったら、我々だけではどうにもならないところだった。まさか、あの飛ばない船を飛ばそうなんて我々では思いもつかなかったよ。」

「違いますよ。単に私の方がこういう経験があるというだけです。あまり褒められたものではないですから。」

バルチェはニヤッと笑うと、形式通りの敬礼をして出ていった。相変わらず口数の少ない男だ。それだけにこういう時には信用ができる。住民の避難は彼に任せておけばまず間違いないだろう。それにしても昨日初めて実験船キャティの内部を見せられた時には正直言って驚いてしまった。100年以上前に建造された物だというのに、まだ充分使用に耐えられるという事実と、現在の科学と同じかそれ以上の装置を積んでいるということである。

その中でも特に目を見張ったのが推進システム。とにかく、どんな形でもいいから1度宇宙空間へ出てしまえばほとんどエネルギーのロスがない。まず長期航行するには理想的なシステムと言える。100年以上前にこれだけの技術があったということ自体、不思議なことだということと同時に、100年前の戦争がいかに科学を遅らせたということも考える必要があるだろう。

この船がキャティに着陸して以来1度も発進しなかったのは、単に発進システムが故障していたからで、現在の地球の科学力なら修理することなどすぐできる。つまり言い方を変えるならば、発進させることさえできれば、宇宙を航行することは現在でも可能だということなのだ。

確かに1つの賭けではある。故障している発進システムの代わりにMR-7星にさせようというのだから。しかし、今となってはこれがキャティにとって最初で最後の飛び立つ為のチャンスである以上、成功の可能性云々よりもやってみるしかない。

「くま先輩、キャティの住民は基地の一部の人達を除いて、全員乗船し終わりました。あとアルトロンの発進準備も完了しています。」

明子ちゃんが駆け込んでくる。ソルトリバーから戻ってきて暫く様子が変わりどうしたのかと思っていたが、ここにきてキャティの住民の避難が始まると、急に元気になってしまった。

「ところで、湯浅中尉にやって貰いたい任務があるのですが…。」

「え…、何でしょうか？」

「現在、キャティよりアルトロンで約2時間の位置に桂中尉と柴野中尉が来ているんですけど…。」

「えーっ、Myaとシバちゃんがあ…？で、先輩、先輩、2人はいつこっちに来れるんですか？」

「湯浅中尉、他人の話は最後まで聞くように…。で、2人はこっちに向かっていることは向かっているんですが、船の推進装置が壊れていて漂流しているんです。一応ステーションVRがすぐ側にいるんで高橋少佐に修理するように頼みましたが、ひょっとすると向こうが直るのを待つよりこっちから迎えに行った方が早いと思いますので、湯浅中尉、アルトロンであの2人を迎えに行ってくださいませんか？」

私がこう説明すると、明子ちゃんはキョトンとした顔になる。

「分かりませんでしたか？湯浅中尉にはアルトロンで2人を迎えに行っても欲しいと言ったつもりなんですけど。」

「どうして、先輩はあたし達3人と組むことに反対じゃなかったんですか？」

「もう好きとか嫌いとかの問題ではないでしょう。今はあなた方3人の能力が必要なんですよ。このキャティの為にはですけどね。早く行ってくれますか？MR-7星の爆発まで余裕などないのですから。」

「はい、行ってきます。」

明子ちゃんが入ってきた時と同じような勢いで駆け出していく。…と思ったら、そのまますぐUターンしてまた戻ってきた。

「指田少佐、ありがとうございます。」

ちょっと照れて、そして敬礼と同時にもう1度飛び出す。

さて私もそろそろ実験船に乗り込まなきゃならないな。爆発まであと12時間、奇跡が起きるかどうか、すべては神のみぞ知る…というところだ。

## 第二章 「爆発まであと12時間」

H6. 26. APR

### 第三章 「爆発まであと9時間」

「指田少佐、明らかに君のやっていることは規則に違反したことだ。今からでも遅くはない、速やかにキャティを脱出し、地球へ帰還したまえ。」

100年振りに蘇ったキャティの通信システムを使って交信した先は連邦政治局本部局だった。モニターに映っているのは本部局長の顔、別に本部局長に何か言いたいことがあった訳でもないのだが、結果的に最高幹部につながってしまったので、この機会にこっちの状況を伝えようと思ったのだ。思っていた通りにこっちの話など少しも聞く気はないらしい。それでも私が通信を切らないのは、私が連邦委員長にそそのかされてキャティに来ていると思っているらしく、的外れな説得を彼が始めたせいだろう。はっきり言ってそういうのは迷惑であるし、一応きちんと訂正したかったのだ。確かに最初のきっかけを与えてくれたのは連邦委員長だったし、そう思われても仕方がないとは思いますが、そういう訳では断じてないことは私が一番よく知っているのだ。だいたい、どっちかという初めは彼の言っていることをすべて信じる気などなかったのだ。しかし、この目で惑星キャティを見て、この耳で住民の生の声を聞いた現在となつては、誰がなんと言おうと、私自身がキャティを救う気になっているのだ。今さら本部局長が何を言ってきたって、まともに聞く価値があるとはとても思えない。

「…と、とにかく、いま君が戻ってくるならば君の今までの業績から考えて、我々も今回のことは不問にしようと思っているのだ。」

「いえ、戻る気などまったくありませんから、そんな心配はなさらなくて結構です。」

「何故だ！君ほどの地位の者が…。」

「地位なんて関係ないですよ。私は1個の人間としてキャティの住民を助けるのは当たり前のことだと思っているだけです。もしそれが悪いことだと言うのであれば、処分でも何でもどうぞ自由に。」

私は一方的に通信を切った。MR-7星の爆発までにやらねばならないことが山ほどあるというのに、こんなつまらないことで時間を潰したくない。

「すまない、我々のためにサシダの立場をさらに悪くさせてしまった。」

私の後ろで今のやり取りをずーっと見ていたバルチェが本当にすまなそうな声を出す。しかしどちらかと言うと、地球の上層部がこんな人間だということをバルチェに知られたことで、私の方が謝りたい心境だった。

「いや、こっちこそ申し訳ないですよ。あんな人間ばかりじゃないんですけどね。どういう訳だかキャティに関することにはみんな異常に神経質なもので。」

「そうか…。」

バルチェは言葉短かくそう言っただけで、これについてどう思っているのか、その表情からは読み取れなかった。ただ他の者はともかくとして、バルチェだけは何か知っているだろうということは私にも分かる。だが今ここでそれについて論じる気には到底なれない。

実験船キャティは100年振りにその活気を取り戻したとは思えないほどひっそりと静まり返っている。みんなMR-7星の爆発に怖えて、それぞれのコパートメントルームで祈っているんだろうと思う。今このキャティで動いているのはキャットテイル-セブンの人間と、メインコンピューターだけだった。

「静かだな…。」

「え…？」

「とても、この星系がなくなるとは思えないよ。」

バルチェはスクリーンを見ながら、そこに映っている惑星キャティの最後の姿を自分の目に焼き付けようとしているかのように、ジッと見つめ、そう呟いた。

「私はこの惑星で生まれ、この惑星で育った。ここ以外の惑星と言ったら、第4惑星のコボルくらいしか知らない。だから、私はこのキャティを一番素晴らしい惑星だと思うよ。」

バルチェの目に1粒の涙が浮かんでいる。それを部下に気付かれないようにそっと拭くと、恥ずかし気にちょっとだけ笑ってみせる。

「私は仕事柄、色々な惑星を見てきましたが、このキャティはその中でも自然豊かな素晴らしい惑星だと思います。そう、私が見てきた中で2番目に素晴らしい惑星です。」

「2番目？じゃあ1番目はどこだと思うんだ？」

「1番目ですか？1番目はもちろん私達の故郷である地球ですよ。」

肩をポンと叩くと…、半分親しみを込め、半分怒りを込め、バルチェはまたいつもの表情に戻る。その瞬間、かなり大きい地震がキャティを震ぶる。

私もバルチェも立っていたものだから、慌てて近くの物に掴まった。それでも私は転んでしまったが、バルチェはさすがに転ばず、もう大声で部下達に指示を出している。

「今のは何だ？シュタイン、至急調査しろ。プッペン、お前は客室の方へ行って今ので住民に怪傷がなかったかどうか見てこい。」

シュタインとプッペンはそれぞれ返事をするとコンソールルームを出ていく。

「ファイラ、MR-7星の現在のデータをスクリーンに出してくれ。」

「はい、少しお待ち下さい。」

…と待つほどのこともなくスクリーンのキャティの風景が、難しい数式の列に変わる。その中のいくつかは私が見たことがない類の物だったが、大半の数式は現在のMR-7星の地殻の変動を示していた。

「現在、ブリーズ、キャティ、コボルの3惑星コボルの5つの衛星は直列に並び終わっています。たぶんその影響が出始めているのではないかと考えられます。2時間後にブリーズの衛星ケントムが、5時間後にはキャティの衛星リュウイとメラニが、6時間後にはブリーズのもう1つの衛星リマールが、7時間後にはキャットテイルとソルトリバーが、そして9時間後に惑星アンバサとその衛星フォーケン、チョコラが直列に加わり、MR-7星系の惑星直列が完成します。」

ファイラの説明とともにスクリーンの数式が、MR-7星系図に変わる。

「今まで気付かなかったけど、まるで示し合わせたように衛星までこの惑星直列に参加しているじゃないか。」

「サシダ、地球のデータの中に、これほど大がかりな惑星直列が行われたという記録はあるのか？」

「いや、少なくとも私の知っている範囲ではありません。」

だいたい、こんな完璧な惑星直列じたい有史以来初めてじゃないだろうか。通常、軌道面がずれていたり、周期が合わなかったりして、ここまで完全に惑星が直列に並ぶことは珍しい。それが衛星まで加わるとなると、もう奇跡としか言いようがない。

バルチェは急に落ち着かなくなり、コンソールルームをウロウロと歩き回る。

「隊長、住民は全員無事です。しかし、かなり不安が広がっていますので、これ以上抑えるのは難しいと思います。」

「不安か…不安なのは私だってそうだ。よろしい、プッペン、下がってくれ。」

「はい。」

プッペンがまた自分の持ち場に戻ると入れ代わりにシュタインからの連絡が入る。

「こちらナイトウォーカー、キャティどうぞ。」

「司令官、シュタインから連絡が入っています。」

ファイラからレシーバーを受け取ると同時にスクリーンはシュタインの顔に変わる。シュタインの顔は心なしか少し青冷めて見える。

「何か分かったか？」

「キャティにはまだ特に変化はないのですが、さっきのソルトリバーの光りが気になったんでキャットテイルまで行って見たのです。そしたら猫が…。」

「猫…？」

「シュレディングアの猫達です。どういう訳だかキャットテイルに集まっているんです。もうそれは不気味な光景でしたよ。」

バルチェは私の方を見て首を傾げてみせる。この男が、こんな仕草を見せるのはとても珍しい。ということは、かなりの異常事態だということなのだろうか。

「シュタイン、そのまま猫達を観察してくれ。もし猫達が何か行動を起こしたらすぐ連絡してくれ。」

「はい。」

シュタインの顔が消えて、またキャティの風景に戻った。

バルチェは何かを思いつめているようで、コンソールパネルをジッと睨み付けたまま、まるで動かない。

何か知っているかと思いファイラの方を見るが、こっちが何か言う前にファイラの方で先に察して首を横に振っている。

「バルチェ…。」

「サシダ、我々には代々の責任者にだけ受け継がれている言葉がある。赤い太陽と銀色の猫がキャティを救うという物だ。キャティの猫はすべて住民のペットだ。この船に住民と一緒に乗り込んでいる。その中には銀色の猫などいない。もし銀色の猫がいるとしたら、シュレディングアの猫しかいないんだ。しかし、赤い太陽というのが分からない。」

MR-7 星は星系が小さい割に青白く輝く大変明るい恒星だ。つまり、生まれてこのかた、太陽を見たことのないバルチェ達には、赤く輝く恒星が存在することが分からないんだ。しかし、ここで言う赤い太陽が太陽系の太陽を指しているとは思えない。

地殻変動を起こしている MR-7 星が急激に冷えるとなると赤くなる可能性がある。しかし、あと 9 時間でそんな変化が起こると思えない。とりあえず POWLA に問い合わせることができるなら、はっきりするんだが…。

不安だけがつの中、確実にその瞬間へと近づいていく。



### 第三章 「爆発まであと 9 時間」

H6. 26. APR

#### 第四章 「爆発まであと5時間」

「絶対にシュレーの方が賢いんだから。」

「あら、でも、うちのユメはまだ子供だもの、将来はシュレーに負けない可愛い猫になるんだから。」  
Mya と明子ちゃんが自分達の猫のことで言い争いを始める。ようは自分の猫を自慢したいだけなんだろうが、何もコンソールルームでやらなくてもいいじゃないかと思う。

「ねえねえ、あたしのユメの方が可愛いですよ。」

「くま先輩、シュレーの話しを Mya に言ってやってくださいよ。こいつは頭いい奴なんですよね。」

「桂中尉も湯浅中尉もいい加減にして下さい。少しは柴野中尉を見習っておとなしくしたらどうです？」

「だってえ…。」

明子ちゃんが2人を連れて戻ってきてからというもの、急にキャティの中が賑やかになってしまった。コンソールルームでは誰もが2人を見て苦笑いをしている。まったく、今がどういう時だか本当に分かっているんだか。

バルチェなどは少し考えたいことがあるからと言って、コパートメントルームにこもったまま戻ってこない。お陰でこの指揮権を任せられてしまったじゃないか。

「頼みますから、せめてここの人達に迷惑にならない程度にして貰えませんか？」

「はあい。」

こういう返事の時だけは2人とも息が合うんだから…。

「で、シバちゃんは？」

「まだ現状のシステムでは通信設備が完全に使えないんで、柴野中尉に見て貰っているんです。あなた方も何か手伝ってくれませんかねえ。」

「はあい、分かりました。」

とりあえず2人ともキャティのシステムチェックを始めてくれた。キャティのシステムは私でも分からない部分が多いので、当分はおとなしくチェックしててくれるだろう。

「サシダさん、シュタインから連絡が入っているんですけど、出て貰えますか？」

バルチェが閉じこもっているせいで、雑用が全部こっちへきてしまう。あのお嬢さん方がこの船に慣れたら少し外へ出てみるか。

「こちらサシダ、バルチェがいま手を離せないんで代わりに報告を聞きます。」

「先ほどのキャットテイルの猫達なんですけど、ちょっと様子が変わります。」

「変って、どういう具合に？」

「少し前に、何か一斉に MR-7 星の方向を見上げて鳴き始めたんですが、そいつらの身体が急に光り始めたんです。」

「光り始めた…？」

「そうです。白くというか銀色というか、とにかくだんだん光が強くなってきます。さっきのソルトリバーの時と同じ光りです。」

赤い太陽に銀色の猫か…。ソルトリバーのあの科学者も猫に訊いてくれと言っていたし、これあの猫達が今回の爆発劇に1枚噛んでいることは確かだな。

どうするか…。これ以上は危険が大き過ぎる。ましてやナイトウォーカーでは爆発の時に耐えられ

ないだろう。ここらが潮時だろうな。

「シュタイン、キャティに戻ってきてくれ。できたら戻りながらそこからの MR-7 星のデータを収集して貰えると助かるが。」

「分かりました。帰艦します。」

シュタインとの通信が切れると、あちらこちらからホーッとという声が聞こえてくる。

「ん…？」

「サシダさん、ありがとうございます。」

「何が？」

いきなりお礼を言われても何のことかさっぱり分からない。えーっと、確かこいつは…クロノだったっけ…。バルチェの補佐官のはずだが、全然目立たない性格のせいですっかり忘れてた。

「シュタインのことです。よく帰艦命令を出してくれました。」

「べつにバルチェでも同じことしたろう。べつに特別なことじゃないでしょう。」

「いや、それが違うのです。バルチェなら、たぶん MR-7 星爆発のギリギリまであのままだったでしょう。本来ならこれは補佐官である私の役目なのですが、この通り気が弱いもので…。」

他の者も同じ思いなのかな。だとすれば、バルチェも相当誤解されているんだな。

「ま、バルチェにはバルチェなりの考えがあつてのことだから。」

今までワンマンでまとめてきただけに部下に誤解されやすいが、バルチェなら強引になんとかしていくんだらう。私が口を出すまでもないな。第一、他人に口を出すどころか、私なんかたった3人をまとめるのに四苦八苦しているんだから。

私も元々キャティの件に関わるまで1人で動いていて、初めて今回の任務であの3人組と組んでかなりの戸惑いがあったし。やっぱり不安も大きい訳で、どうしてもあの3人にはきつい言い方になってしまった。だが、それももう必要なさそうだし、私は私のやり方で MR-7 星を見届けてやる。

「指田先輩、とりあえず使えるようになったんで見て頂けますか。」

柴野さんがぐったりしたよう子で EER から戻ってきた。助手ということでこの隊員が2人ほど手伝ってくれていたが、2人とも柴野さん以上にぐったりしていて、いったい何が起きたのかよく分からない。

「で、何か分かりましたか？」

「バッテリーが良くないようです。…というか、もう寿命を遥かに越えていますから。だから短時間なら問題ないんですが、長時間になると発信できなくなってしまうんです。」

寿命か…、それじゃ仕方ないな。だいたいこの船自体いま動くのが奇跡に近いんだから。

「でも、バッテリーをこの船のサブパワーと直結しましたからとりあえず使えるはずですよ。」

「ご苦労さま、さっそく試してみよう。柴野中尉は少し休んでいていいですよ。」

「はい…。」

「わーい！」

な…なんで、私は柴野さんに言ったのに他の2人が喜ぶんだ…？

「お嬢さん達はまだ始めたばかりでしょうが、私は柴野中尉にだけ言ったつもりなんですけど。」

「ずるーい。シバちゃんばかり。」

「そうですよ、あたし達久し振りに3人揃ったというのに、ゆっくりと話しもできないんですよ。」

あ…、前言撤回、やっぱりビシッと言わなきゃ駄目だ…。

「あのお…、サシダさん、実はとても言いにくいんですが。」

2人にビシッと言おうと思った瞬間、上手い具合に気をそがれた。

「何ですか？」

またクロノだ…、どうもクロノと喋ろうとすると気が抜けてくる。そういえば心なしミヨーに似ているような気もしてきた。

「そのお…、できたらそちらの2人には遊んでいて貰った方が…。いえ、べつに邪魔だとかそういう意味でなくて。そのお…、なんて言いますか、他の者の気が散るんです。女性がコンソールルームに入っていることが珍しいので…。」

ま、分からないでもないな。キャットテイル-セブンには女性隊員がいないし、一般住民と接触する機会も少ない。おまけに珍しく見る女性がこのお嬢さん達じゃねえ…。

「分かりました。そちらの言う通りにします。では、桂中尉と湯浅中尉もブレイクエリアへ行って下さい。」

「はい、行ってきます。」

まったくげんきなんだから…。でもまあ、それでもいいか、それが彼女達のやり方なんだろうから。理解できないまでもそれだけは分かる。

「じゃ、悪いけどその2人にはもう少し頑張ってもらって、クロノ、ここの指揮権はあなたに任せますから。」

お嬢さん方は人の話しなどもうてんで聞いておらず、3人だけでワイワイ騒ぎながら、コンソールルームから出ていってしまった。その様子をみんなが呆気にとられて見ている。

「さ、やりましょうか。」

さっきまで柴野さんの助手をやっていた2人を促して通信席につく。

さあて、どうしよう…？今さら連邦政治局の人間と話しをしても仕方ないような気もするし、かといってステーションVRにはとりあえず用はない。どうせ放っておいてもあと3時間でたっちゃんから連絡が来るだろうし…。

通信システムが直ったのはいいが使い道がないんじゃないかな。

「どこと交信するんですか？」

「そうだねえ…。」

こりゃ真面目に考え込んでしまうな。どうするか…？せめてその辺に船がいれば適当にスキャナー発信してみるんだが…。いや、待てよ、ひょっとしたらいるかもしれないな。

「範囲はMR-7星系圏内でスキャナー発信します。」

「サシダさん、現在星系圏内を航行している船など1隻もいないと思いますが。」

「そうですよ。それより、ソルトリバーなんてどうですか？確かまだあそこの教授は残っているはずだし。」

確かにこんな時MR-7星系に来る船などいないだろうな、あの人以外は…。

「いや、船はいるよ。それもどうしても連絡をつけなきゃならない船がね。」

私は徐々に動かすシステムに確かな手応えを感じながら、次々とスイッチを入れていく。

「出力は極力押えてくれ、ステーションVRには気付かれない。それからこっちのコールサインはキャットテイル-セブンでなくル克蘭シエセルを使ってくれ、たぶんその方がいいと思う。」

「はい！」

0.2 ミリ秒の信号で発信角 25° ずつの前方位スキャナーを始める。それを 3 回繰り返した時、どこからか聞いたことのないパルスが飛び込んできた。

「どこからですか？」

「キャットテイルの裏側です。しかし、ブロックがかかっている内容は分かりません。」

あの人のことだ、発信した信号が私からの物だということはもう解読していることだろう。だとすれば、私の知っているコールサインを使うはずだな。

パネルコントロールを DCM に移す。パネルよりこっちの方が実は使いやすい。私はあの人の言葉を思い出そうとしていた。

「天高く猫眠る星…。」

「え…、何か言いましたか？」

「いや、何でもなし。」

2 人が怪訝そうな顔をしている。

天高く猫眠る星…、確か柴野さんがキャティを指して言った言葉だったっけ。もし連邦委員長が私のことを試しているのだとしたら、こんなピッタリの言葉はないはず。

私は DCM にこの言葉を書き出した。

「何ですか、これは？」

「たぶんこれでブロックが破れるはずだよ。やってみてくれ。」

「はい。」

再度このコールサインを返信してみる。すると待つほどもなく連邦委員長の声がコンソールルームに流れる。

「こちらパルサレア、キャティどうぞ。」

「やっぱり連邦委員長でしたか、まさかこんな近くにいるとは思いませんでした。」

「よく私がここにきていることが分かったな。」

「地球で更迭されたという話しは情報部から聞きましたので、たぶん来るだろうと思っていました。」

「そうか…、そちらの状況は？」

「現在、すべての住民を実験船キャティに収容したところです。ただ、こちらの船の発進システムが壊れている為、自力で飛び立つことができません。」

「どうするんだ？」

「MR-7 星の爆発の時のエネルギーを利用して宇宙へ出られれば、あとはなんとか航行可能なので、地球へ行くつもりなんです。」

「そうか…、いや、ご苦労だった。と言ってもこれからが大変なんだが…。」

「そうですよ。委員長はこれからどうするんですか？」

「ソルトリバーへ行く。そこであそこの教授をパルサレアに収容してからステーション VR に向かうよ。」

「分かりました。それではお互い無事でまた会いましょう。」

「ああ、そうだな。じゃあ…。」

なんとなくあの人の声を聞いてホッとした。これであとは完全に MR-7 星の爆発を待つだけになっ

た。

爆発まであと5時間、すべての準備は整った。

#### 第四章 「爆発まであと5時間」

H6. 26. APR

## 第五章 「Star Trick for Century～ 時代の奇跡～」

外へ出ていたシュタインが戻って来た。上手い具合にバルチェもコンソールルームに戻ってきたので、アルトロンを使って外へ出てみた。念の為だが身体の方も実に久し振りにベア-タイプになった。

今や MR-7 星はその大きさを奇妙な形に膨らませ、まるでラグビーボールのように歪んでいる。しかし、まだ赤いという感じはない。

あと爆発予想時刻まで15分ちょっと、さっきパルサレアのウィンダムと情報交換してみたんだが、その時ウィンダムが出した最新情報だ。あと 15 分でこの美しい星系も粉々に散っていくのかと思うと妙にもったいない気がする。なんて、こんなことをゆっくり考えられるような状況ではないんだけどね。

面白いのはステーションVR、爆発が近いというので念の為もっと離れようとしたらしいのだが、Ryo と たっちゃん がメインタワーを乗っ取り、現在のポイントから動けなくなり、そこへ委員長が乗り込んで来て、逆に MR-7 星系へ向かう羽目になったとか。地球の上層部の慌て振りが目に浮かぶようだ。

DCMに現在の星系の各惑星衛星の動きを映し出してみる。MR-7 星を中心とした同じ円上に散らばる惑星が、今は一方向に集まっている。そして、その惑星の周囲を回っている衛星までが、まるで惑星の動きに合わせるように一直線に並んでいる。あと第1惑星のリュウイとその衛星フォーケン、チョコラが加われば、この宇宙のビッグショーが完成するのだ。

DCM上で表示している液晶時計がMR-7 星の爆発まであと 11 分を示している。私は大きく伸びをしてみた。今までいくつもこんな修羅場を乗り越えてきたはずなのに、こんな時はいつも落ち着かない。

「ピーッ」

いくつかのサインが赤く変わり、信号が入ってきたことが分かる。DCM上にホワイトシープのコールサイン。

たっちゃんだ！

「ステーションVRからアルトロンへ」

「こちらアルトロン、VRどうぞ」

「あ、三好です。POWLA からの最新情報を送ります。これを見て驚かないで下さいよ。」

「どういうことだい？」

私はコンソールを叩いて POWLA からのデータを受け取る。訳の分からない数式が次々と出てくる中、所々出てくる訳の分からない星印。

「この星印は何を意味しているんだ？見たところ何か特定の定数を表しているみたいだけど。」

「何だと思えます？ひょっとすると、そのお陰で MR-7 星系は助かるかもしれないんだそうです。」私はもう 1 度 DCM 上の数式を見直してみた。いくつか出て来る星印の中に…というか白の星印なんだけど、その中に黒の星印が混ざっている。

「その白星印をキャティ定数とします。そして黒星印が乱数を底とする変数だとしたらどうなります？」

確かに都合のいいように解釈して構わないとしたら、惑星直列によって引き起こされる爆発が、惑

星直列によって被害が最小限に押えられることになる。しかし、本当にそんなに都合よくいくものだろうか…？

「実を言えば、本当にそう上手くいくかどうかは柴野中尉にかかっているんです。」

「どういう…、あ、なるほど…そういうことか…。」

黒星印の変数は柴野さんのESP能力なんだ。とすれば白星印はシュレディンガーの猫達だ。やっぱり、あの猫達の身体が光り始めたのは彼らの能力のせいだったんだ。じゃあ、バルチェが言っていたもう1つの赤い太陽とは…？

「でも、せっかくここまで分かったのにもう時間がないんですよ。実に残念です。」

たっちゃんは本当に残念そうな顔をしてみせる。

時計を見るとあと1分30秒…。

「指田少佐、必ず生きて帰るぞ。これは約束だ、いいな。」

急に声だけ委員長が割り込んでくる。

「もちろんです。私も、キャティも、ステーションVRも地球へ帰る為にここにいるんです。それでは好運を祈ります。」

「ああ、グッドラック…。」

それで交信は途切れた。再び静寂がアルトロンの中に漂う。それが普通なのに、それでいいはずなのに何故か最近無意識に彼女達の姿を追っている自分に気が付く。

今になって少し後悔し始めていた。やっぱり、あのままキャティでみんなと一緒にこの瞬間を迎えた方がよかった。そうだ、こんな寂しい思いをするくらいなら…。

時計の数字は爆発まであと15秒。静かに静かにカウントダウンしていくのをじーっと見つめる。14、13、12…。MR-7星、お前は何故その若さで生涯を終えようとしているんだ。やり残したことはないのか？悔いはないのか？5、4、3、2、1…！

「ぴびっ、ぴびっ、ぴびっ…。」

自分でセットしたアラームが鳴り始める。

瞬間、MR-7星が横長に歪み、限界点を越えた。目がくらむほどの光りと熱とが四方八方に散っていく。それがMR-7星の最後の姿だった。

爆発のエネルギーの中で、まるで風の中の木の葉のごとく、気まぐれに吹き飛ばされるアルトロン。その中で確かに私は1つの奇跡を待っていた。それは必ず訪れるはずの物であり、また、訪れないかもしれない物だった。

目の前のコンソールを叩き、私はキャティの存在を確認しようとしたが、残念なことにアルトロンのメインコンピューターは悲鳴をあげると、そのままシステムダウンしてしまった。これではこのアルトロンも無事に耐えてくれるかどうかも危しい。

「指田先輩、大丈夫ですか？」

誰だ…？

このアルトロンは私以外誰も乗っていないはずだ。

「私です。柴野です。こちら実験船キャティは無事離陸しました。多少爆発のエネルギーに巻き込まれていますが、おおむね順調です。」

柴野中尉が…。彼女にそこまで能力があるとは報告を受けていなかったが…。しかし、なぜ急に…。

「触媒です。桂中尉と湯浅中尉は私の触媒なんです。今の私は宇宙と同化しているんですよ。」



テレパシー能力も今までいろいろと事例があったが、まさかこんな形の能力があろうとはね。俺はなんとなくほほの筋肉が緩んで仕方なかった。

あとはあの猫達だ。あのシュレーディングアの猫達にいったいどんな能力があるのか、それともこの遠大な爆発劇その物が猫達の演出なのか。赤い太陽とはいったい何を指しているのか。まだまだ分からない部分が多過ぎる。だけど不安はなかった。必ず良い方向に進んでいる。それだけは確信できる。

「柴野中尉、現在の状況を教えて下さい。」

「MR-7 星は完全に消滅しました。リユーイ、フォーケン、チョコラ、メラニ、ケントム、リマール、プレスは粉々にふっ飛び、MR-7 星のエネルギーに飲み込まれてしまいました。しかし、プレス、ソルトリバー、キャットテイル、キャティはまだそのままの形で残っています。だけど、もう時間の問題でしょう。」

「キャティはどこへ向かっていますか？」

「えーっと、ちょっと待って下さい…。あ、太陽系です。このまま、もしキャティが進んだら、太陽系へ…。」

やっぱり…かな。赤い太陽とは比喻でなく、本当に太陽を指しているとすれば…。

その時、ふとある考えが頭に浮かんできた。まさか…ね、余りにも突拍子もない自分の考えを振り払ってしまう。だが、可能性がまったくない訳ではない。可能性はいつだって存在するのだ。ただ、それを実証する方法が私達にはないので、いつも可能性が先に現実になってしまう。

せめて今 POWLA が使えれば…。

だんだんアルトロン振動が激しくなってきた。これ以上船体もたないかもしれない。私はいつアルトロンが駄目になっても脱出できるように準備を始める。

アルトロンの船内温度が上昇していく。と同時に気圧が急に下がる。普通の人間ならとっくに生きてはいない。次の瞬間、アルトロンのメインパワーがダウンして、それがアルトロンの最後の姿となった。

私の身体は孤独の空間に投げ出された。

## 第五章 「Star Trick for Century」

H6. 26. APR

## 第六章 「新たなる神話と星と猫」

物凄いエネルギーの波に吹き飛ばされ漂流して2時間後、ようやくキャティに收容され、私はやっと一息ついてた。私の周りには柴野中尉、湯浅中尉、バルチェ、ミヨー、2匹のシュレディンガーの猫、そして桂中尉。

さすがに身体はくたくたで、このまま倒れてしまえたらどんなに気持ちがいいだろうと頭で考えながらも、そうはできないでいる。まだすべてが終わっていない以上、まだまだ倒れるには早過ぎるのだ。

「キャティは…、惑星キャティの状況は？」

柴野中尉に問いかけてみる。彼女は少し困った表情を作りながらも、はっきりした口調で答えてくれる。

「あの後、プレスは爆発してしまったんですが、ソルトリバー、キャットテイル、キャティはまだ無事です。」

「じゃあ、今でも凄い勢いで太陽系へ向っている訳ですか？」

「いえ…それが…」

「ん…？」

途端に言いにくそうになって湯浅中尉と肯き合っている。仕方なしに桂中尉に…と思ったら、彼女は彼女でいつの間にかいなくなっている。この部屋から出て行った様子はまるでなかったのに…。

「サンダ、信じられないことなんだが…」

バルチェでさえ言いにくそうな表情を作っている。

「現在、惑星キャティは静止しているんだ。」

「静止…？」

「物理的に説明できる物は何もない、ないが現在の事実を物理的に説明するとキャティは静止しているとしか言いようがないんだ。」

「ソルトリバーとキャットテイルはどうしたんだ？」

「1つになった…、何故そうなったかなんて訊かないでくれよ。私にも訳が分からないんだからな。」バルチェは首を横に振っている。

あのMR-7星の爆発エネルギーを受け、1回は太陽系へ向け吹き飛ばされたはずのキャティが何故静止することができるんだ？あのエネルギーを相殺するだけのエネルギーはどこから来たんだ？

その時、ある考えが頭の中に蘇ってきた。私がアルトロンから投げ出される寸前、ふと思いついてしまい込んだ奴だ。あの時は自分の考えの余りの莫迦莫迦しさに捨ててしまったが、現実において物理的に信じられないことが起きている以上、もしかしてという可能性は残る。

私は手を伸ばし、おとなしく私を見上げる猫に触れた。湯浅中尉になついでずっとくっついてた白猫の方だ。

「教えてくれ、残念なことに君達とは根本的にレベルが違うらしい。認めたくはなかったが、もう私達人類の科学の範囲では説明できないんだ。」

「指田少佐！」

湯浅中尉が顔色を変えて叫び声をあげる。

「もう隠す必要もないだろう？もし説明する気がないなら、今から私が話す説が正しいか間違っ

いるかだけ答えてくれ。」

シュレは相変わらずとぼけて猫をかぶっている。しかし、もう1匹のユメという猫は完全に動揺しているのが見ていて分かる。

バルチェとミヨーには何のことか分からないらしく、2人ともキョトンとして成り行きを見ている。いつのまに帰ってきたのか桂中尉がユメを一生懸命なだめていて、私がこれからやろうとしていることに構ってられないといった様子だ。

「指田少佐、みんな助かったんです。それでいいじゃないですか、それで充分じゃないですか…。」湯浅中尉がその場にしゃがみ込んで、必死に泣くのをこらえている。シュレがゆっくりと、そしてほれほれするような優美な身のこなしで、ひょいとその湯浅中尉の肩に乗っかると、湯浅中尉のほほをペロペロと舐め始める。

「それでいい…とは思うよ。でも、その為にすべてを捨てた人もいることだけは忘れてはいけない。」

「連邦委員長は…。」

桂中尉が何か言いかけて、しかし、それでもぐっとこらえて黙ってユメを抱き上げる。

「とにかくコンソールルームに行こう。その静止しているキャティを見てみたい。」

私達は何か気まずい雰囲気のまま、ぞろぞろとコンソールルームに移る。途中ミヨーだけが居住区の方へ戻っていった。

シュレはしきりと何か考えているようで、湯浅中尉の肩の上で首を傾げて、たまに気になるのかチラチラ私の方を盗み見ている。正直言うと、このMR-7星の爆発にシュレが関わっているかどうか、ソルトリバーで初めて会った時には信じられなかったんだ。でも、1つ1つの事柄が目の前に揃い始めるに従って、何か未知の力がここになくはならないと感じ、私はそれが何なのかずーっと考えていた。

POWLAの情報からその力の1つは柴野中尉のESP能力だと教えられた。柴野中尉の能力については途中から分かっていた訳で、さして驚くというほどでもなかったが、POWLAはそれだけではないということを示していた。

バルチェが惑星キャティに伝わる言葉を教えてくれた時、銀色の猫がシュレ達を示しているとしたかと思えなかったことも、POWLAが示した残りの力がシュレ達であると感じたことも、何の根拠もないただの勘にすぎないが、こうして事実と私の仮設とが一致している以上、そう考える方が自然なのだ。

つまり、シュレ達はどのような方法でかは別として、とにかく自然を動かすことができるらしい。今回の異常なまでの惑星直列は彼らの仕業以外の何物でもないと思うんだ。そして、それによりキャティが助かることも彼らは知っていたはずだ。

私達がコンソールルームに入っていくと、みんなとにかく忙しそうに誰1人としてこっちを見ようとしない。唯一気が付いたクロノだけがバルチェに報告する為こっちへ近づいてきた。

「ちょうどいいところに戻ってきてくれました。今ステーションVRのミヨシ少尉の方から連絡が入ったところです。」

「ありがとう。」

私はちょっと会釈をして前を通り抜けると、通信士からレシーバーを受け取った。

「指田です。」

「あ、三好です。POWLA からの情報を送ります。惑星キャティは完全に静止しています。原因はキヤットテイルとソルトリバーです。こちらでは新しく一つになったこの恒星をバーミリオンキヤットと名付けましたが…。」

「恒星？」

「そうです、恒星です。POWLA はバーミリオンキヤットを恒星と認定しています。間もなくバーミリオンキヤットが自転し始め、キャティも公転運動を始めるはずです。そうすれば完全に新しい星系の誕生になるでしょう。」

一瞬、頭の中が混乱しかけた。いったい何がどうしてどうなったんだ？

しかし、それもスクリーンに映ったバーミリオンキヤットを見て納得することにした。

「赤い太陽…。」

それは赤く赤く燃える太陽タイプの恒星だったから。

「赤い太陽と銀色の猫がキャティを救いましたね。言い伝えの通りだ。」

バルチェがいつの間にか私の後ろに立っていて、感慨深げにスクリーンのバーミリオンキヤットを眺めている。

「キャティの夢とあたし達の夢とシュレ達の夢が1つに重なった時、夢はより現実に近い希望に変わったんです。この星系はシュレ達にとってもあたし達にとっても、新しい未来を与えてくれる星系なんです。」

湯浅中尉が目に涙を浮かべている。

「今のあたしはもう何もできないただの女の子になっちゃったけど、これだけは分かります。今、宇宙の大いなる意志は、この新しい恒星を祝福している。」

柴野中尉もスクリーンをじっと見つめている。

「まるで太陽みたい…。」

桂中尉は単純にこの結果を喜んでいるようだ。

「とにかくこれよりそちらに向かいますので、5分後には収容できると思います。色々と話したいことはあるんですけど、とりあえず後でということ。」

たっちゃんの声が聞こえてきても誰も聞いていないようだった。そういう私できえ、このバーミリオンキヤットの前ではどうでもいいような気になっていたのだから。しかし、いつまでも、この気分浸っている状況ではない。まだまだやらなきゃいけないことは山のようにあるのだから。

「了解、では5分後に…。」

でも、あと5分、5分くらいはこの気分でしたかった。

## 第六章 「新たなる神話と星と猫」

H6. 26. APR

## 第七章 「ここから軌跡を刻む為に」

エアカーのゆるやかなスピードを楽しんだ後は、私は5時間振りに手足を伸ばせてホッとしていた。やっぱりJRにすればよかったと内心後悔もしていたが、それもこれも、ここJR小諸駅を見た途端どうでもよくなっていた。

実を言えばここへ戻ってきたのはもう1年振りだという訳で、本当に久し振りだったりする。思わず駅舎に向かって拝んでしまう。

のおんびり連邦政治局の建物まで歩くと、久々の小諸の街並が私のいない間に随分変わったことに気がつく。ただ街全体の雰囲気はいつ帰ってきてても相変わらず優しかった。

「指田です。局長に帰ってきたと伝えて貰えますか。」

入口に座っている受け付けの女の子にIDカードを提示する。私のいなかった1年の間に顔の知らない女の子になっている。事務的な顔でIDをチェックすると返してよこした。

「そのまま局長室へどうぞ。」

私は黙って頷くと、エレベーターのスイッチを押した。昔ならこの辺でくすくす笑いを背中に感じたものだったけど…。

待つほどもなく来たエレベーターに乗ると一気に5階まで上がる。降りてすぐ右へ行くと、突き当たりの部屋が局長室だ。私は深呼吸を1回、続いてノックを2回…、これも昔のまま忠実に再現するとドアを開ける。

「指田です。入ります。」

「わざわざすまないな。その辺に適当に座ってくれ。」

無愛想な態度も昔のそのままだ、それでも暫く見ない間にかかなり白髪が増えている。

「ロンドンの方はどんな様子だ。」

「ほぼ引き継ぎ終わりました。まだ暫くは向こうへ行かねばならないかもしれませんが、たぶん大丈夫でしょう。」

「そうか…。」

相変わらず言葉少なで、思わず溜息をついてしまう。

「まあ、とりあえず当分はここでのんびりしてくれ。君のいない間にだいぶ知らない人間も増えているが、まあ上手くやってくれ。」

「はい、じゃあこれから科学部の方へ行ってみますので。」

「そうだな…。」

結局何の為に呼ばれたかよく分からないまま局長室を出た。少なくとも妙な任務を押しつけられなかっただけでもラッキーと思うべきなんだろうな。

科学部へ行く為、階段で4階まで降りる。その途中、下から上がって来た者とぶつかりそうになって慌てて脇へよけたが、その拍子に相手の手にしていたファイルを落としてしまった。

「あ、すいません、大丈夫ですか？」

「いえ…、え…？指田先輩！」

名前を呼ばれて、改めてその子を見るとなんと柴野さんだった。

「先輩、いつ帰っていらしたんですか？」

「たった今帰ってきたばかりなんです。いやそれにしても、本当に久し振り。ひょっとしてキャテ

「イ以来じゃないですか？」

「そうですね、もうあれから1年半も経つんですね。ついこないだのこのようにのに。」

新星系バーミリオンキャット星系は惑星1つに無数の小惑星を持つ奇妙な星系として誕生した。POWLAに計算させたところ、バーミリオンキャットの位置する座標は、他の恒星に与える影響がいちばん小さい、奇跡的な座標であることが分かった。

結局、連邦政治局もこの新星系を認め、正式にアウトーツェンに加入することとなった。その裏には元連邦委員長の最後の根回しが物を言ったという噂も流れていた。本人がいなくなった今となつては、どのへんが本当なのかよく分からないのだが。

「これから科学部に挨拶しに行くんですが、後で文化部にも行きますから。」

「えーっと、あたし、今は文化部じゃないんです。キャティから戻ってきてすぐ、あたしは局付きの扱いになっているんです。月の半分はESP研究所なんですよ。」

「それはそれは、じゃあ、どこで会えますか？」

「そうですね、それでは情報部の部屋で。」

「すいません、情報部ってどこにあるんです？私がここにいた時にはまだ情報部自体がなかったものですから。」

「あ、昔の科学部資材課倉庫です。もっとも今は情報部の人は誰もいませんけど。」

「へえ、じゃ、またあとで。」

柴野さんと別れて、科学部のドアを開ける。ドアを開けた途端、吹き出してくる熱気と活気。それは昔と全然変わらない。

「ただいま。」

そう口にしてはみたものの、何となく自分で恥ずかしくなってしまう、誰も聞いてなかったであろうことは私にとって好都合だった。

とにかく、気を取り直して部屋を眺めると確かに随分と知らない顔も増えている。その中で、相も変わらずちょこまかと走り回っている科学部室長の姿を見つけた。

「シモさん、お久しぶりです。」

シモさん…下村室長はちょっとだけ顔を上げると、別に久しぶりでもお帰りでもなく、まるで普段と変わらない口調で…。

「あ、悪いけど、そこの図面取ってくれる。」

「え、あ、はい、これですか？」

「サンキュ、もうちょっと待ってて、もうすぐ終わるから。」

シモさんは、なんか難しい顔でキーボードを叩くと、軽く溜息をついて大きく伸びをした。

「いつ帰ってきたの？」

「今日です。また暫くこっちにいることになるようですので。」

「今、大佐だったっけ、開発部の方はどうすんの？」

「今後はロンドン支局の方で全面的にやってくれるそうです。これで私もようやく科学部専任になれるみたいです。」

「そうかあ、じゃあさっそく何かやって貰おうかな。…と、その前にお茶でも飲みに行こうか。よし、終わり。」

シモさんはコンピューターのパワーを落とすと、勢いよく立ち上がる。

「どこに行く？」

「できたら情報部に。さっき柴野さんに行くって約束しちゃったんで。」

「じゃ、そうしょ。」

側にいた若い子に一言ことわると、私とシモさんはエレベーターで地下まで降りていく。

「シモさん、私の知っている者は、いま何人残っていますか？」

「そうねえ、アリコちゃんと恵理ちゃんぐらいかな。Ryo と たっちゃん は年中どっかへ行っていて帰ってこないし、タミさんは今アフリカ圏に行ってるし、あとは佛木が残ってるかな。」

「へえ、宇民は何やってるんです？」

「新交通システムの開発とか言ってた。なんかムービングボックスを作るとかって聞いてるけど、どうなったのかな？」

アフリカ圏は戦争の被害は少なかったものの、開発そのものが他地区の復興の後回しにされ、遅れていたものだった。

エレベーターから降りると、地下2階がすっかり模様変えされていることに驚かされた。昔の資材倉庫だった頃の面影は全然ない。おまけにもう1つ驚くことがあった。

「よお、久しぶり、ようやく戻ってきたな。」

「Ryo！」

「ども、お茶の用意もできてますよ。」

「たっちゃんまで、いったい何で…？」

これはシモさんも知らなかったようで、たっちゃん相手にはしゃいでいる。

「情報部をなめんなよ。お前がここへ帰ってくるって聞いてわざわざシドニーから戻ってきてやったんだ。」

Ryo は昔とまるで変わらない態度でそう笑う。一瞬昔の科学部が蘇えたようだった。だけど、それはやっぱり一瞬のことで、現実には錯覚に過ぎないということが次の瞬間に分かる。

「そういえば、シモさん、POWLA-TWIN はどうですか？」

Ryo の言葉にシモさんの表情が凍りつく。

「どうして Ryo が POWLA-TWIN のこと知ってるの？うちの局長以外知らないことになっているはずなのに。」

「だから情報部をなめちゃいけないって言っているでしょ。ついでに言うと、本部局の方で本格的に2代目の POWLA の開発を考えている。これに対しモスクワとシドニーの2つの科学部が名乗りを上げています。」

「聞いてないよお、POWLA-TWIN はそういう意味で作っている訳じゃないもん。」

「でも、結局はそこまで可能性を持っているんでしょ？」

なんだなんだ、いったい何の話をしているんだ？POWLA-TWINなんて聞いたこともないぞ。

「ちょっと、その POWLA-TWIN って何なんですか？」

大体 Ryo が私に会う為だけに戻ってきたなんてのはおかしいと思ったんだ。どうせメインの目的はこっちだったんだ。

「しょうがないなあ、どうせノリには手伝って貰うつもりだったし話すけどお。ようは現在の POWLA の付加装置なのよ。現在の POWLA じゃいずれオーバーヒートするのが目に見えているから、そのバックアップの為にね。」

成程、私がロンドンにいる間にそんな話しが進んでいたのか。

「ついでにいうと、POWLAのオーバーヒートはキャティのせいなんだ。POWLAは元々100年前の戦争後、地球復興の為に作られた物だ。作られた時点ではPOWLAのデータにはキャティがなかった。それに加え、俺達が今までに作ってきた端末装置も負荷になっている。もうPOWLAも寿命なんだよ。」Ryoの言葉に思わず頷いてしまう。そういえば思い当たることがいくらでも出てくる。最近のPOWLA端末器の故障の多さは実はこんな物なのかもしれない。

「分かりました。シモさん、ぜひ手伝わせて下さい。キャティがからんでいると知った以上、やらない訳にはいきませんからね。」

「そうこなくちゃ、じゃ、お茶飲み終わったらさっそく説明するよ。」

「はい！」

「やれやれ、気の早い連中だ…。」

Ryoの言葉に久々に笑ってみせた。キャティから戻ってきて以来、久しくなかった雰囲気だ。やっぱり私はここがいいのかもしれない。この信州でのんびり暮らすのが…。

## 第七章 「ここから軌跡を刻む為に」

H6. 26. APR



## 第八章 「これまでの運命に別れを告げて」

「ピンポン、ピンポン…、12時発木星行きリビター号、乗船の方は2番ゲートへお集まり下さい。ただいまより乗船手続きを開始します。繰り返します…。」

人気の少ないロビーに乗船を告げるアナウンスが響く。ここは数少ない宇宙港の1つ、シドニー宇宙港。普段から人の少ないことで有名である。

「さて、そろそろ行くか。」

年の頃は27歳くらい、小さいアタッシュケースにキャタピラ走行式のロボットを1台連れている。のんびりと立ち上がると2番ゲートへ歩き出す。そのあとをロボットが額のインジケーターを点滅させながらついていく。

「リビター号乗船の方はこちらへお並び下さい。」

宇宙港の職員がそう叫ぶ前に10人位の人々が既に並んでいて、乗船手続きを取る為に順番を待っている。ロボットを連れた男もその列の最後尾に並んだ。

乗船カウンターの向こう側にスペースドッグが見える。もちろん、これから乗るはずのリビター号もここから見える。

「次の方どうぞ。」

ぼんやりとドッグの方を見つめていて、前の人の手続きが終わったことに気付いていなかった。職員に声をかけられて初めてそのことに気付いて、慌てて書類をカウンターに乗せた。

「えーっと、手荷物はそちらのアタッシュケース1つとこちらのロボットですね。」

「はい。」

「ロボットはオンラインしていますか？」

「いえ、今は何も…。」

「では、あちらのゲートよりお入り下さい。」

職員に示された所のゲートから中へ入る。こんな風に一人人間が対応するのも今じゃここシドニーだけになっている。他の宇宙港では完全に自動化され、職員の姿を見ることなどありえない。

お陰でいつも閑散としているこの宇宙港だが、こうして目的など持たず、ふらりと旅に出るような者だけが好んで利用するので、今だに昔ながらに人間が対応しているという訳だ。

ゲートを抜けてすぐユニバーサルリフトに乗せられ、そのままりビター号の乗船デッキまで連れていかれる。ここで最終チェックを受け、ようやくリビター号へ乗り込んだ。

「やれやれ、ようやく一息つけるぞ。」

男は誰に言うでもなく、そう言う自分の手にあるチケットを確認し、自分の座席を捜し始める。男の座席はF-1、3列ある座席の一番窓際だった。

座席の記号1つ1つを目で追いながら進んで行くと、なんと珍らしいことに自分の座席の隣に他の人が既に座っている。大体がこんな船に乗る人がいること自体が珍しい訳で、普通ならわざわざ他人同士を隣り合わせにするようなチケットの売り方はしない。とすれば多分向こうが間違っているということになる。

「失礼ですが…。」

近付いて声をかけてさらに驚いた。下を向いて本を読んでいるので顔は分からないが、そこにいたのは女性なのだ。木星なんかは何の用だろうと思いながら、もう1度声をかけてみる。

「失礼ですが…。」

「どうぞ。」

その女性は顔も上げずに、ちょっと足を引っ込めて男が通れるだけの隙間を空けてくれる。仕方なく肩をすくめてみせると、その隙間を通して自分の座席に辿りついた。

キャタピラ走行のロボットは一瞬どうしていいのか考えていたが、結局そのまま一番通路側の席によじ登った。

「一人旅ですか？」

男は何気なく、そうほんの世間話でもするつもりで話しかけてみたが、その女性は本から目を離そうともせず、ただ一言返しただけだった。

「いいえ。」

男は諦めた。土台いきなり話しかけたせいで余計に警戒心をあおってしまったのかもしれない。

「当船は12時発木星行きリビター号です。発進の時刻まであと少しお待ち下さい。」

時計に目をやるとあと10分で発進だ。この手の内側の旅客船ならそろそろ発進の為エンジンが始動を開始する。つまり太陽圏内では通常のワープ機関は使用していないのでロケットエンジンを使わなければならないという訳だ。

とりあえず特にすることがある訳でもなく、各座席に付いているTVのスイッチを入れると、ヘッドホンで音声を出してみる。画面はちょうどニュースの時間で新しい植民惑星についての話しをしていた。それは最近キャティの話題ばかり続いていた中で大して意味を持つ物とも思えなかったが、画面の中ではキャティと新しい植民惑星のつながりを教授と呼ばれる人物が喋っていた。

やがて、ロケットエンジンの振動が気になりだす頃になって、最後の客がすべり込んできてドアが閉められた。もう発進まで僅かな時間だった。

「当船はまもなく発進します。全員シートベルトの着用をお願い致します。尚、シートベルトは大気圏脱出するまでは許可なく外さぬようお願い致します。」

発進前の決まり切ったアナウンスが流れると、船内の乗客も少しは緊張するのか、ざわめきが一瞬なくなる。

振動と騒音がひととき大きくなって、リビター号はゆっくりと動き始める。リビター号はVTOLタイプなので、発進の際の余計な重力は完全に消されている。快適と言えないまでもそこそこに乗り心地はいい。

見る見るうちに上昇して、あっという間に大気圏を抜けてしまった。目の前の赤いインジケーターが消えると、乗客の誰もが軽い溜息をついてシートベルトを外し始める。

「はあっ…。」

いきなり本を閉じて顔を上げる。今まで微動だにできなかった隣の女性も他の乗客と同じように溜息をつくとシートベルトを外し、大きく手を広げて背筋を伸ばした。

「さすがに旅客船は静かですね。」

男はボーッとしていたが為に、初めは自分に言われたことに気が付かなかったが、女性がもう1度話しかけてきたのを聞いて、慌てて振り向く…と。

「え…？」

「あたしもいつかは1級航海士の資格を絶対取るんだ。ね、ウィンダムもそう思うでしょ。」  
ウィンダムと呼ばれたロボットは嬉しそうに額のインジケーターを点滅させる。

「なんでこんな所に…。桂中尉…。」

「和岐さん、1人で行こうたってそうは行きませんよ…というのが信州局一同の見送りの言葉です。」

和岐と呼ばれた男は完全に訳が分からず、ひたすら慌てまくって何も言葉にならない。桂中尉と呼ばれた女性は意地悪っぽく微笑むと鞆を床に置いた。

「情報部から変装用のかばんを1個貰ってきちゃった。和岐さん全然気付かないんだもん。笑いこらえるのに苦労してたんだから。」

「桂中尉、信州の方は…というよりキャティの方は…。」

「あ、あたし連邦政治局辞めたんです。だからその中尉っていうのもやめて下さい。ちなみにキャティの担当は明子ちゃんに任せて来てますから大丈夫ですよ。」

「なんなんだ…？」

いきなり訪ずれたこの驚きをどう対処すればいいか分からず、和岐は両手で頭を抱え込んだ。

1年半前に連邦委員長を辞任して以来今日まで、少なくともキャティ関係の物はどんなこともチェックしていた。キャティ担当の彼女の24時間など当の本人より詳しいはずだったのに…。

「実を言えばこの計画って1年半前からあったんです。つまり和岐さんが連邦委員長を辞めた時から、たぶんいつかは1人で遠くへ行ってしまうだろうと。それなら誰かがくっついていこうじゃないかって。たまたまあたしも連邦政治局を辞めるつもりだったし、辞めてどうするってあてもなかったものだから。」

「主媒者は誰だ…。」

「くまさんですよ。ちなみに三好せんぱいもこの計画に参加してたんです。」

それでは和岐が気が付かないのも無理はない。辞めてからの情報というのはず一と三好中尉から送って貰っていたものだったのだから。

「で、どうするつもりなんだ？」

「どうもしません。あたしはただ和岐さんについて行きたいだけですから。」

そう言ってニッコリ笑う桂を見ていて、やっと髪の毛を切ったことに気付いた。何となくそのまま正視できず、パイと横を向いてしまうと、やっと聞き取れるかっていうくらいの小さい声で言った。

「勝手にしろ。」

## 第八章 「これまでの運命に別れを告げて」

H6. 26. APR

## 第九章 「シュレインガーの遺産」

あたしは珍しくこの基地の中で走っていた。基本的に走ろうが歩こうが別にそれほどの差がある訳じゃないんだけど、でも走らずにはいられなかった。

「クロノ、見つかったって本当？」

コンソールルームに辿りつくや否や思わず大声を出してしまった。中にいた人が一斉に振り向いた。やだ…恥ずかしい。

「アキコ、落ち着いて、猫達は逃げやしないよ。」

「そんなこと言ったってえ。」

ここはキャットテイル-VIII、実験船キャティをそのまま基地にしてしまっている。ちなみにクロノはここの責任者で、この船の中のことを一番詳しく知っている人物と言える。

「で、どこだったんですか。そこへはすぐに行けますか？」

「場所はすぐ近くだ。だが、アキコも知っての通り現在小惑星帯へ行くことは禁止されている。」

「でも…。」

「分かっている。確かに例外はいつの場合でも存在する訳なんだが、こればかりは私の判断だけでは許可を出す訳にはいかないのね。」

新星系パーミリオンキャットは恒星パーミリオンキャットの周りを惑星キャティと無数の小惑星が周っているという大変珍しい構成で1年半前誕生した。そのせいでどんな影響があるのかがまるで分からないことから、小惑星帯への航行は禁止されてしまっていたのだ。

だけど、その小惑星帯の中で猫達が見つかった。初めから予想はしていたけど、お陰ですぐに飛んで行こうと思っていた気持ちに水を差されてしまった。

あたしの猫シュレーがいなくなったのは新星系パーミリオンキャットの誕生に、すべての人が歓喜している時だった。最初あたしがシュレーのいなくなったことに気づき、すぐにMyaのユメもないことに気付いた。だけど、いなくなったのは2匹だけじゃないことに気付いたのはもっと後になってからだった。

MR-7星の爆発前、猫達はみんなキャットテイル上にいた。その猫達全部がすっかり姿を消したのだ。うん、違う。もしかするとソルトリバーとキャットテイルが1つになった時、そのまま消滅したのかもしれない。少なくともキャティのみんなは後者だと信じていた。

だけど猫達は必ずどこかで生きている。あたしにはその確信があった。その為にわざわざキャティに駐在させて貰っている訳だし、猫達に関する全権も任されている。

「一応私の方からバルチェに許可を求めてはみるが…。」

クロノが申し分けなさそうな表情になる。言葉の後半は言わなくてもだいたい分かる。たぶん、駄目ということなんだろう。だけど、もし駄目なら駄目でもあたしは勝手に行くまでだ。たとえ連邦政治局をくびになっても、あたしは猫達を優先させる。

とりあえずあたしは大きく頷き、クロノはそのまま出て行った。

「昔から悪いけど最近特にバルチェとクロノの仲が悪いって噂だよ。あんまり期待しない方がいいと思うよ。」

あたしとクロノの話しをずーっと聞いていたシュタインが、クロノが出ていったのを見計らってそう言いに来る。

「地球の上の方に向け合った方が早いよ。」

他のみんなもそう口々に慰めの言葉をかけてくれる。ま、それはそれでありがたいと言えはありがたいんだけどね。結局ここでああだこうだ言っても始まらないから。

「でも、どっちにしたってあたしは行くと思うから。」

それだけ言ってコンソールルームを出てしまう。これ以上ここにいてもどうしようもない。

そのまま展望室へなんとなくブラブラ歩いてきて、ふいに Mya にこのことを教えてあげなきゃと思いつく。でも、あの子はいまどこにいるのか分からないしな。せめて地球に連絡先を残しておいてくれりゃいいけど。

展望室へ入ると、一面真っ赤な光が溢れている。誰かがスクリーンをバーミリオンキャット観測用にしたままなんだ。そう思って操作パネルに近づいていくと、誰かがいることに気が付いた。したままじゃなくていま使用している最中だったんだ。それにしてもいったい誰が…？

どっちにしてもこの光りじゃ、たとえすぐ近くで向き合ったとしても顔も分かりやしない。あたしは操作パネルを勝手にいじって天井のスクリーンを一旦通常の観測モードに戻した。

「あ…。」

「三好せんぱい！」

な、なんでこんな所で三好せんぱいがバーミリオンキャットを観ているのよお。急に心臓の鼓動が速くなってくる。

「あ、明子ちゃんか、ちょうど良かった。これから捜しに行こうと思っていたんだ。」

「えーん、どうして三好せんぱいがいるんですか？」

「うーん、だいぶ困っているんじゃないかなと思ってね。」

あたしは思わず理性がすっ飛んでしまった。すっ飛んでしまったもんだから走るしかない。何故って言われても困るけどとにかくあたしはもと来た方へ向かって、つまりコンソールルームへ向かって走り出した。

「どうしたんだあ？」

いきなりあたしが走り出したもんだから訳が分からず三好せんぱいも走り始める。当然のことだけど三好せんぱいの方が足が速いからすぐに追いつかれてしまった。

「ちょっと待って、いったい何だっというの？」

「別にい…。」

「じゃ、逃げることないじゃない。真面目に猫のことで話があるのに。」

猫のことと聞いちゃあ、逃げる訳にもいかない。でもコンソールルームの人達に見られんのも何となく嫌だから、居住区の方へ来て貰うことにした。

実験船キャティの居住区を隊員用の個室に割り当てたものだから今は完全にゴーストタウンになってしまっている。あたしも1つ借りて使わせて貰っているんだけど1人で住むには広すぎるし、かといって女性が他にいないんで他の隊員の部屋からは離れているという具合で、ほとんどコンソールルームか展望室に入り浸っていて、ここへは寝る時くらいしか帰ってこない。

「へえ、さすが女の子の部屋だね。」

「そんなことはないです。ちなみに隣は Mya のなんです。あの子がここに来ることはまずもうないと思うんですけど、なんか部屋はいっぱい余っているからそのままにしておけって言われて。」

「名誉市民みたいなもんだ。」

「それ以上です、だってその隣はシバちゃんのだもの。彼女、キャティの爆発以降、1回もここには来ていないんですから。」

「ま、いいじゃない、ひょっとして何かの役に立つかもしれないし。」

三好せんぱいはそう言いながら、部屋に転がっていたプラスチック製のパズルをやりだした。確かミヨーが暇つぶしに置いていった物だ。24万通りも組み合わせがあるという割にまだあたしは1回もできていない。

「せんぱい、紅茶とコーヒーとどっちがいいですか？」

「できたら紅茶、でも気にしなくていいから。」

あたしはとっておきの紅茶…キャティでのみ生育するという特別の紅茶を出した。この紅茶は香りも独特なんだけど、それ以上にこれを飲みながら願いごとをすれば願いがかないやすくなるということで、キャティの人達には知られている。

「で、猫のことで話してなんですか？」

「見つかったって聞いたんだけど、もしかしてこの規則に縛られているんじゃないかと思ったんだ。自分なら情報部の人間だからそういうところ無理がきくからさ。」

「行けるんですか？」

「明子ちゃんさえ良ければすぐにでも、ブルーバーで来てるから許可もいらないし。」

「あ、お願いします。すぐ支度しますから。」

猫に会える。シュレーに会えるんだ。あたしの頭はもう1回ふっ飛んだ。

あたしはシュレーに会った時の為に1つだけ荷物を持った。それはMR-7星の爆発の中で生まれた宝石。見る度に色が違って見える。キャットテイル-VIIIの科学班ではとうとう物質の判定ができなかった。あたしはこれをシュレーの首にかけてやるつもりで今までずっと持っていたのだった。

「それは？」

「シュレーにあげるんです。」

いつのまにか三好せんぱいがこっちを見ていた。あたしが持っている石を指さす。

何故かもう落ち着いてしまっていた。三好せんぱいが目の前にいるっていう事実にも、シュレーにこれから会えるということにも、もう理性はすっ飛ばなかった。

「三好せんぱい、ありがとうございます。」

そして、ふいに気付いた。三好せんぱいはわざわざその為だけに地球から来てくれたってことに。あたしは心の中で他の人にも感謝した。

「さ、行こうか？」

「はい。」

## 第九章 「シュレーデインガーの遺産」

## 第十章 「天高く猫眠る惑星」

恒星バーミリオンキャットの周りを取り囲むようにして、ゆっくりと動く無数の小惑星の群れ。その中でとび抜けて大きい小惑星が1つ。少しずつ少しずつその小惑星の群れから離れ始めている。1艇のスペースシップが惑星キャティから飛び立つと真っ直ぐこの小惑星を目指してやって来る。船体の横には飾り文字でBLUEVARと書かれている。その型式から一目見て地球のスペースシップだということが分かる。このタイプの船はキャティには1艇もないのだ。

その船は暫く小惑星帯の側を静かに漂流していたが、やがて目的の小惑星を見つけるとゆっくりと近付いていく。。

しかし、小惑星と言っても月くらいの大きさはあり、驚いたことには地球とよく似た大気まで存在していた。しかも見渡す限りの草原、ほほをなでる心地よい風、どこからか響いてくるやさしい音、それらすべてが高く低くゆっくりと流れている。

草原の中ほどに降り立っていたスペースシップから1人の少女が降りて来る。一応スペースジャケットは着ているものも、他はほとんど船内にいる時と変わらない服装でだった。それが彼女にとって一番着慣れた服装だったのだろう。

少女は肩まで伸びた髪の毛を風になびかせて、何かを求めるように走り出した。

その後ろからもう1人、今度は青年がゆっくりと何か用心深く、確認するような動作でスペースシップから降りてきた。少女はそれに気付くこともしないで遠くに見える小高い丘へ走って行ってしまふ。

青年はその少女をしばし眺めていたが、突然あとを追って走り始める。そしてちょうど小高い丘に登り切る直前で少女に追いつき、そのまま2人で丘の一番高い部分まで歩いていった。

いきなり目に飛び込む地平線とその一面に存在する数百匹の猫の群れ、少女は激しい呼吸の中でそれらを凝視し、そして不安そうに青年の顔を見た。青年は暫く猫と少女の顔を交互に見ていたが、にっこり微笑むと力強く肯いてみせた。

少女は急に安心したような表情になり、ゆっくりと大きく深呼吸すると、ありったけの大声でありったけの思いを込めてその名を呼んだ。

「シュレーっ！」

その瞬間、一斉に数百匹の猫がこっちを向いた。そして一斉に走り始めた。それはまるで、少女がその名を呼ぶのを合図と決めていたかのようでもあったし、また単に少女の声に驚いただけなのかもしれない。とにかく見る見るうちに数百匹の猫は姿を消し、あとに残ったのは少女と青年と全身が真っ白な猫が1匹だった。

「シュレーっ！」

少女はもう1度叫んだ。今度はさっきよりもずっと親しみを込めて呼びかけるかのように…。

猫はジーっと少女を見つめ、そしてゆっくりと少女の足許へとやって来た。

「シュレー、元気そうで良かった。」

少女は自分の足許の猫を抱き上げた。

「何故来たんだね？」

その声には明らかに不満そうな感情がこもっていた。

「だって、来たかったから。」

少女はそう言ってペロッと舌を出すと、笑いを隠し切れなくて表情で青年を見る。少女は猫の表情まで気にしていなかった。ただ、やっと会えたという喜びしかなかったのだ。

「ここは我々の最後の聖域なのだ。人間が来るのはこれで最後にして欲しい。」

「さあ、どうかなあ…？」

「もうすぐ我々は次の段階に登ることになる。それをお前らに邪魔されたくはないのだ。」

猫はこれ以上は言っても無駄と思ったのか、それとも言うべきことをすべて言ったからなのか、身をよじって少女の手から逃れると、見事な身のこなしで地面に着地する。

「あっ、待って。」

少女は猫を呼び止めると、手に持っていた不思議な色の石で作ったペンダントを首に掛けてやる。

猫はその間だけ大人しくされるままにしていたが、他の仲間と同じくどこへとも知れない場所へ走っていった。

「話しはくまさんに聞いていたけど、猫が喋るのって初めて聞いた…。」

「三好せんぱい、これをどう報告するつもりですか？」

「そうだなあ…。」

2人は暫くそのまま黙って、猫のいなくなった草原をぼんやり眺めていた。やがて少女はもう1度ゆっくり大きく深呼吸してみた。少し湿っぽくどこか潮の香りを乗せた空気が肺いっぱい広がる。青年はふいに何かを思い出したように少女の方に向き直った。

「昔の柴野さんの報告書にこんなのがあったっけ。」

青年はそこでわざと一息ついて、すこし大袈裟なポーズをとってつける。

「例えて言うなら、天高く猫眠る星ですってね。」

少女はもういちど草原を見周した。そして青年の顔を見た。次に空を見て、大きく頷いた。

「うん。」

## 第十章 「天高く猫眠る惑星」

# 『天高く猫眠る星』 一天高く猫眠る星シリーズ 5-

H6. 26. APR